

白文が貴誌にも、「作歌八十年」にも記載されていないのです。窺い知る機会が無いことは誠に残念です。

「九日の旅」の文中に、奈良女子大学における記念講演会を控えて、間島翠山氏が佐佐木先生の和歌を朗詠された情況を「自分は一人の聴衆として、おのが作品の美しく吟ぜられてゆくのを聞いた。」と記録されています。その

「おのが作品」について「『思い草』の昔から、半世紀を超える作品につき一集一首の抄出ですべて十二首、最も感慨深く耳傾けた者は、おそらく作者なる自分自身であったろうかと思った。」と記述されるほど衆芳歌から選ばれた白眉の十二首の歌集を周知する機会を与えてほしいのです。「逝く秋」の合唱曲として作曲された美しいメロディーが奈良を訪れる人々によつて再び愛唱されることを望んで楽譜を添えて掲筆をいたします。

(奈良西ノ京 薬師寺副住職)

※原文のまま。ただし、ふりがなは編者による。

展示室だより 「逝く秋」この歌は、歌集『新月』をそして歌人信綱を代表する一首といわれている。時は晩秋ところは大和の国、奈良西ノ京。その薬師寺の塔の上を一片の雲が飛んでゆく。秋という時間、塔の上の空間、その交点にあるひとひらの雲といふのは、まさに象徴的といえようか。さて、この名歌はいつごろ詠まれたものか、「九日の旅」のなかで信綱は『たまたま一旅人として明治の末

年頃に訪れ、晩秋の日に思ひを寄せた諷詠が、かく久遠に遺るといふことは夢のような心地がする……』と回想している。この作をふくむ「大和めぐり」には他に「秋さむき唐招提寺鶴尾の上に夕日うすれて山鳩の鳴く」「秋雨に飛鳥を行けば遠つ世のおもひするかな萩の花ちる」などがある。

(文化財保護課 辻 正)

編集机から 松久保秀胤師から「薬師寺東塔讀歌」の楽譜をいただいたので、さっそく市教育委員会の渥美和美先生にお願いして歌つていただき、その感想をうかがつた。「前奏十一小節は主旋律を予測させるような和声進行になります。おごそかで、しかもさわやかなメロディラインになっています。主旋律は歌詞を大切に、イメージを損わないよう作曲されていて、『逝く秋の大和の国の薬師寺の』はゆつたりと流れ『塔の上なる』で上行し、充分にのばして『ひとひらの雲』はpp(ピアニッシモ)で入り、緊張感をもつて歌われています。また、後奏の三連符のアルペジオも、雲をゆつたりと見ているような余韻を残して、しっかりと歌わっています。」さすが専門家だけに音楽用語を使った感想はややむずかしいが、いま仲間の先生方三人でピアノ伴奏二部合唱をテープに吹き込んでもらっているので、今秋の特別展では『幻の名曲』をはじめて鈴鹿路で聞いていただけるものと今から期待している。(辻)

# 佐佐木信綱資料館だより

次	奈良薬師寺歌碑 建立懷想	松久保秀胤
目	信綱一首(十二)	辻村田邦夫
展示室だより	・佐佐木信綱資料館 (五・〇五九三・八二・九〇三一) 〒五二三 鈴鹿市神戸九一一一五	正
	・佐佐木信綱資料館 (五・〇五九三・七四・三一四〇) 〒五二三 鈴鹿市石薬師町一七〇七	

## 逝く秋の大和の国の薬師寺の塔のうへなる一ひらの雲

—歌碑建立懐想—

松久保秀胤

落慶法要を十月十一日に執り行ないました。その法要次第の中に「東塔讀歌」と題して、佐佐木信綱先生の「逝く秋」の一首と會津八一先生の「南京新唱」の一首「水煙の天つをとめが衣手のひまにもすめる秋の空かな」の二首を唱歌にして、導師の慶讀文にあわせて東塔の美しさを賞讃し、参拝の方々にも随喜していたことを企劃いたしました。

当時

私の机上に黄ばんだ一冊の「薬師寺歌碑建立表白・九日の旅・心のふるさと」小冊誌があります。昭和三十年五月二十九日 佐佐木信綱先生の衆芳歌の中の人口に膾炙されている一首「逝く秋のやまとの國の薬師寺の塔のうへなるひとひらの雲」の歌碑が東塔の菩提樹の緑陰に建ち、除幕式に光臨を囁うした小旅行の記録誌であります。

五月二十四日熱海駅御出発から、六月一日御帰着までの見聞交情を詳細に御自身作文なされ、建碑当日の情景を彷彿とさせる記録誌であります。



東塔

當時 副住職高田好胤、私の若僧は二十七年四月ころ、相談のために奈良市坊屋敷町の前川佐美雄邸をお訪ねしました。「二首を並べることは良いとは云えません」と明言されました。作曲については奈良女子大学教授 前田卓央氏を推薦して下さいました。四月下旬、大学に前田先生をお訪ねして

お願いしたところ、約半年の余猶しか無いこともあり、著名な歌人の秀歌であるばかりでなく、素晴らしい音節で構成されている上に、季節感と臨場感に溢れる歌い上げ、歌い込みの豊かさに圧倒される和歌であると云う理由で、即答を避けられました。言辞華就の容子から六分は断わられたと受取りながら落膽して辞去したことでした。

東塔落慶法要には天平時代創建時の落成法要さながらを再現したいと願い、奈良時代の法要型式に因み、水煙から五色の開眼縷を引き、参詣隨喜者の面々の手許にその縷が届くよう、莊嚴し、導師が「宝塔涌出開頭」の儀の所作の時、上・下層の扉が一齊に開き、散華楽が虚空にゆるやかに鳴り始めると共に、散華が法雨となつて沛然と降る中、「東塔讚歌」が一部合唱となつて清福な境内に響きわたり、秋空に映える東塔の屹然とした情景を想像した日のことを想い起こします。

落慶法要の空想を胸に抱いて斜陽に照る東塔を眺め、静寂な伽藍を行立している時、西塔趾（再建以前）の林叢の中に人影が見える。訝りながら近づくと梅雨空を見上げた。

「東塔讚歌」の樂譜

## 信綱一首・11

逝く秋の大和の國の薬師寺の  
塔の上なる一ひらの雲大正元年（一九一二）刊、第二歌集『新月』  
信綱先生、時二歳四。

寒の奈良を出発、梅花の香り漂う熱海に降り立った悦こびと竹柏園佐佐木邸をお訪ねした感激を凝胤師は昭和二十九年二月十日の日記に克明に記録しています。

私は高田好胤法兄から意外なことを聞いたことでした。建碑の和歌の三十一文字に「の」が六文字も詠みこまれていてことを先生に直接お尋ねしたと云うことでした。

佐佐木先生は「のが多くて恥かしいことですが、和歌の道では“の”はいくつ重なり合っても良いことになつていいます。」と仰言られ、古い歌の例をひかれ、「のののののののののじこののめけりののののべにもはるのぞむらむ」と具体的に説明され、さらに先生のお歌の持つ音韻のひびきから来る清秀無比な清澄感と最終句が名詞切れによる余韻の深さ、また「逝く」に「遊く」でなくて晚秋の大和の碧空一片雲無き澄清紺碧の氣運を歌いこんでいることを教えていたゞいた様子を先生の表情を手振り身振りを交えながら口調さながらに話してくれたことでした。

三月中旬には佐佐木先生から歌碑に鏤刻する原本となる親筆の懐紙が送り届けられました。

前川佐美雄様の御来駕を得て、歌碑の型体などについて協議をし、橋本師は東塔の下、菩提樹の傍に建碑することであり。懐紙の氣稟を損なわないためにも、金堂本尊薬師三尊像の須彌壇に使用された大理石を歌碑材に使用することを提案したところ、前川様は菩提樹の緑蔭に眞白の大石が懷紙の雰囲気を醸し出す最適な石材だと絶賛されました。

「九日の旅」に除幕当日の模様は先生の情緒豊かな麗文をもつて詳細に記録されていますから私が今絞べる余地はありません。

強いて加筆させていたゞけば、貴誌の巻頭に当日の参加者を撮した写真に「薬師寺本坊にて」の一葉は小生が小使遣いを貯めて買った安価な「リコーオーライクス」が歴史的な一面を記録しているのです。今にして汗顏の思いです。

ながら立つ前田卓央先生。嚴肅な形相に踏み、立去ろうとする私。東塔を直視する前田先生の瞳眼は今も不忘の一事です。

元來、インドのスツーパは日本の塔の相輪（宝珠、水煙、九輪、伏鉢、平頭）の部分だから、伏鉢に釈尊の舍利を納め、佛徳を讃えて、ガルーダ・マホラーガ（聲聞衆・天人衆）たちが雅曲を献じ、花を撒いた佛事・故事に因んで水煙には笛吹童子・散花天人、舍利捧持天人等がデザインされていることを話しながら、水煙模型を一覧していたゞいた時、笛吹童子に深い感銘を受けられたのか、前田先生は水煙の前に坐りこんで動こうとされなかつたこともあります。

大学の学期末の休暇の昼過ぎに前田卓央先生が伽藍を歩いておられるのに遇い、佛足蹟碑を案内しました。

「舍加乃美阿止 伊波弥宇都於伎」（しゃかのみあといわにうつしきをき ゆきめぐり うやまひまつり わがよはをへむ このよはをへむ）の歌詞の通り、佛足蹟を围绕し、詠唱しつゝ、廻つては正面で礼拝し、歌つては廻り、遠道を続け、朝な夕な、日ながら、樹下石上に説教示します釈尊を、敬慕して止まない萬葉人のみ佛への渴愛の情が、佛足蹟歌をして詠唱され、レチタティーヴ風に歌唱したことが国文学史上、肯依されていることも話したことがありました。

と記してある。

私は大阪ローヤルホテルを出発すれば奈良に直行すると思つたところ、大阪御堂筋の南久太郎町附近に標石の立つてゐる「旅に病んだ芭蕉終焉の地 花屋の跡」に車を停めて、白い百合の花の一束を供えて合掌される。先生の文学に対する謙虚な態度と感性の豊かさに敬畏の念を深くしたことでした。

河内國分・いかるが・龍田を越えるまで余暇を見ては萬葉集大家であられる佐佐木先生に萬葉集の佳歌をその地に適した一首を詠み上げたり、地名を語りながら奈良に入つたことを鮮やかに覚えています。その時に詠み上げて下さつた一首が「作歌八十二年」に掲載していただきました。誠に畏れ多い事です。

奈良市に近づくと、奈良ホテルに入る前に前川佐美雄君の坊屋敷邸に寄りたいと仰言られたことです。

前川佐美雄氏は佐佐木信綱先生主宰の「心の花」の同人であり、弟子であられたでしょうが、既に『日本歌人』の歌会の主宰者であります。前川先生は「僕は『心の花』の歌風にはどうしてもあいませんね。」と話されたことがありました。『東塔讀歌』のことで相談申上げた時は「佐佐木先生は昭和の柿本人麿か大伴家持ですよ」と仰言られ、東塔讀歌には佐佐木先生の歌を何度も繰返しの唱歌にすれば良いと注言を受けたことでした。副住職高田好胤の熱い

後日、音楽論集を私は披見して羞紅したことがあります。それは前田先生は毎年、薬師寺修二會、薬師悔過や東大寺修二會、観音悔過（お水取り）に参籠され、「聲明」を和音や聲楽的な立場から研究され、音楽理論等の論文を発表しておられました。先生は学際的にも博学篤識なお人柄であられ、加えて日本音樂に魂魄を傾倒しておられることが悉知して、深く敬愛いたしました。

九月中旬、近鉄線西の京駅に降り立たれた前田先生に相遇し、十月十一日落慶法要の迫る私の胸裡は焦躁の火炎に灼けていた時でした。『遊く秋の』ではなく、『逝く秋の』の初句に曲想が適しているか、音域・和音・聲質等が適しているか、決心がつかないので此と話しかけて来られた前田先生の口許を私は臆目をもつて一視した。「逝く秋の」の初句は「遊く秋の」と違つて、中秋以降の奈良の空の清澄さを詠み込まれた佐佐木先生のエピソードを、前田先生は奈良在住の直門の弟子さん方を訪ね聞知され、この会談の一言であることを知った私は、愚昧の淵を低迷する恥慨の念に身が震えました。

数刻経て、淡い月影が東塔の上に微光を見せ、雁金の啼き聲のひびく境内から、疾風のように立ち去られました。

数日も経たないある日、奈良女子大学付属高校生から、薬師寺東塔を詠んだ和歌の合唱曲の練習をしていると聞いた私は、歎聲をあげて驚喜したことを見えていました。私は

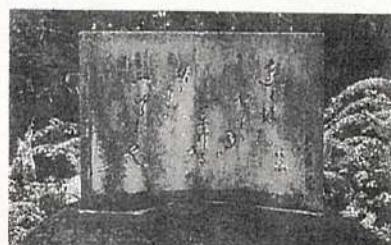
その曲想、メロディーを聞きたくて学校に押しかけ、歌唱指導の先生 広藤タカ（旧姓大瀬）先生に聞かせて欲しいと頼みましたが、初演当日まで作曲者に無断で聞かれることは駄目です。又先生はそれを望まれる人ではありません。とキッパリ断わられたことを思い出します。

十月十一日 清秋快晴の空。屹然とした東塔、莊嚴な落慶法要の法悦に溢れる裡に、大導師橋本凝胤師の宝塔開頭の儀の所作に入るや、五色の開眼縷は秋陽に映え、上下層の開扉と共に、多色無数の散華が舞い散る中、「東塔讀歌」の調べが二部合唱の歌聲となつて、清韻な謡波となつて盛儀の伽藍にひびき渡つた。伝統ある法要の正儀の次第の中に「東塔讀歌」をもつて、儀式に現代的意義付けが加わり、参拜隨喜者の感動はひとしお深く、強烈に受取められたことでしょう。新聞報道等にも歌詞は云うに及ばず、歌曲歌唱ともに素晴らしいと絶賛した記事が掲載されました。

私は歌碑建立までの経緯と「東塔讀歌」が誕生した情況を私情を挟んで述べました。

次に歌碑除幕当日の状況は「九日の旅」に詳述されていますので、主催した寺側から補う小文を綴ることにいたします。

「九日の旅」小誌は「二十八日。早朝、上野精一君らが来訪せられた。薬師寺から松久保秀胤君が自動車で迎へに来られた。初夏らしい朝のラッシュアワーの街に出る。」



歌碑

願いにはだされて会津八一先生の「水煙の天つをとめが衣手の」の歌と並唱することを諒解されたことでした。それは昭和二十八年初夏のころのことでした。

翌二十九年正月十五日、元旦より十四日まで國宝秘佛吉祥天女画像を本尊とした修正會が嚴修され、結願の夕方、

節會らしく膳を整え、精進料理を酒肴にして祝膳が始まり、前川先生から歌碑建立の贊意を伺うために熱海まで佐佐木先生を訪ねて下さる旨申出て下さったことでした。

節分明けの翌日、大吉をトして再遇を約して下さった前川氏が薬師寺地藏院を来訪された。前川氏から「國宝東塔のもとに、佛足蹟歌碑も立つ同じ境内に並び建つことは誠におおけないことです」と佐佐木先生は仰せられ、非常に感激され、建立除幕日が決まれば、参列する意趣であることが報告され、地藏院の茶席は悦こびの興風で満ぎりました。

早速 橋本凝胤住職は高田好胤副住職（当時）を同道して熱海の佐佐木先生邸をお訪ねすることになりました。嚴

